



監督 箕島 マツゲン

## 西川 忠宏氏(58)

# 仕事も野球も人一倍

—8月の第44回全日本クラブ選手権で2年ぶり5回目の優勝を果たした。

◆昨年は準優勝で悔しい思いをし、今年の都市対抗では1次予選の初戦で敗れた。重圧のかかる戦いの中、選手たちが目の色を変えて優勝し、チームの成長を感じた。投手陣はエースの和田拓也がけがから復活したこと、高卒4年目の松尾大輝が一皮むけたことが大

きかった。攻撃面では、3番の夏見宏季を中心に昨年から主軸を担う選手が結果を残し、機動力でかき回すこともできた。約20年間、監督をしてきたが、選手の能力的には今まで一番強いチームだという手応えを感じている。

—今年1月にチーム名が「和歌山箕島球友会」から「マツゲン箕島」に変わった。  
◆きっかけは、今季から、選手

全員が「松源」（和歌山県内を中心に展開するスパー）で働くようになったこと。チーム名に会社名が入ったことで職場での認知度が高まり、選手たちが「応援されている」と実感する機会も増えた。クラブ選手権の後には祝勝会も開いていただき、「本当のプレッシャーを感じてきた」と言う選手もいた。重圧を力に変えな

いといけない。  
—選手たちには仕事と野球の両立を求めている。  
◆仕事も人一倍、野球も人一倍で初めて認められるということ。1日8時間働き、仕事の後や休みを利用して野球をして、周りが休む暇がなくて、あんたら大変やな」と思ってくれた時にやっと応援されると思う。仕事で一生懸命、頑張る姿が、野球により取り組みやすい環境を作ることにもなる。

—10月下旬に京セラドーム大阪で開幕する日本選手権はクラブチーム代表として出場する。企業チームを倒すためには、  
◆先取点を挙げ、競った展開で終盤を迎えたい。そのためには、守りではころびを見せないことが大切。企業チームはミスから大量点を奪う集中力がある。日本選手権に向けてもう一度、守備と投手陣を鍛え直したい。選手たちには、クラブチームだからといって、番狂わせを狙うのではなく、「対等に戦って企業チームに勝とう」ということを常に言っている。  
—「マツゲン箕島」として初めて臨む日本選手権の目標は。  
◆これまで5回出場し、まだ勝ったことがない。チーム名が変わったことで、今大会からユニホームも一新する。まずは白星をつかんで、新たな歴史を作りたい。  
【聞き手・真下信幸、写真・丸山博】

にしかわ・ただひろ 1961年2月、和歌山県有田市生まれ。箕島高2年春のセンバツは故尾藤公(ただし)監督のもと4番・三塁で優勝に貢献し、3年時は甲子園春夏連続出場を果たした。卒業後は電電近畿(現NTT西日本)に入社。96年に発足した箕島球友会の発起人を務めた。99年に現役を退き、監督に就任した。